

＜ワークショップ報告＞

①「初年次教育学会誌編集委員会企画： 初年次教育学会誌への投稿論文の書き方 Ver.2」

担当者： 藤田哲也(法政大学)

概要： 第7回大会開催の時点で、「初年次教育学会誌」は第6巻第1号まで発行済みであり、次の第7巻第1号の発行に向けて編集作業を行っている最中であった。編集委員会としては、より多くの会員から本誌への投稿論文が寄せられることを望んでいる一方で、掲載する論文については一定の質を保つことに責任を負うという立場にもある。実際に、過去に投稿された論文の中には、残念ながら我々の求める基準に合わずに、掲載できなかったものもある。大学教育においても、到達目標や評価基準を明示することが必須になっている。とりわけ本学会のように、会員の持つ学問的背景に多様性がある場合には、投稿論文に対してどのような観点および基準で査読を行うのかを、事前に周知しておくことが望ましいと考える。前大会に引き続き編集委員会企画を、論文の体裁・書式に関する基本事項の確認からはじめ、「研究論文」「事例研究論文」それぞれについて掲載可と判断できるための最低限必要な要素についての、編集委員会の意向を会員の皆様に説明する機会とした。2014年度から、論文投稿の手続きが変更になったため、2013年度までとの違いについても説明を行った。

キーワード： 初年次教育学会誌、編集委員会、投稿論文、研究論文、査読

②「クリティカル・シンキングを育成する初年次教育」

担当者： 川島啓二(国立教育政策研究所)

池田史子(山口県立大学)

久保田祐歌(愛知教育大学)

概要： 学士課程の学修成果のひとつとして、クリティカル・シンキングの能力や態度の向上が求められている。一方、初年次教育科目として最も多く行われているのはレポートの書き方を中心とした日本語ライティング・スキルの育成である。本WSは、クリティカル・シンキングと論証型レポートの類似性に着目し、論証型レポートを作成する過程を通じて、クリティカル・シンキングの能力や態度を育むような授業デザインを提案することを目的としたものであった。前半では、クリティカル・シンキングの概念や学士課程教育の目標としての定義、とくに初年次生を対象とした教育への意義や導入方法について、ミニレクチャーを行った。さらに、クリティカル・シンキングと論証型レポートの類似性についても確認した。後半では、グループ活動を中心に構成した論証型レポート作成のワークをご体験いただいた。ワークは、課題提示、情報収集、グループ討論、ジグソー法を用いた知識の再構築、レポートの

アウトラインへの変換という流れで進行した。

キーワード：クリティカル・シンキング，論証型レポート，グループ討論，ジグソー法

③「協同学習の考え方と進め方」

担当者：関田一彦(創価大学)

概要報告：昨年に比しては少数ながら，多様な専門の先生方 16 名にご参加頂いた。このワークショップでは，協同学習の技法のいくつかを使って，①初年次教育における協同学習の意義，②一般的なグループ学習に比べたときの協同学習の特長，そして③協同学習の代表的な定義について，ペアや 4 人組での参加者同士の交流を通じて学び合った。少し時間が押して，後半駆け足の部分もあったが，ご自身の体験から協同学習の考え方や進め方のイメージを掴み，理解を深めて頂けた。以下，ワークショップの流れを示す。

- ・ウォーミングアップ(自己紹介など)
- ・背景説明：アクティブ・ラーニングと初年次の課題(学習の構え・社会人基礎力)
- ・意義説明：グループ学習の弱点と協同学習(Cooperative Learning)の効用
- ・定義説明：協同学習の定義
- ・振り返り：学んだことの確認

キーワード：協同学習，グループ学習，アクティブ・ラーニング

④「学生を能動的にするハイブリッド型授業」

担当者：三浦真琴(関西大学)

概要：アクティブ・ラーニングとは行為・動作であり，状態・態度である。ここに到達するには学生をどのような学習者(例えば自己主導的学習者，省察的学習者，協同的学習者など)に育てるかを勘案する必要があるが，そこに簡便至極の手法があるわけではない(そもそもアクティブラーニングは手法ではない)。したがってまず教師は育てたい学習者像を描かなければならない。次にこの学習者像を目指して教師が考えるべきは，How to Teachではなく，What (not) to Teachである。教育への熱意(というよりは自らの教授内容への拘泥)は必ずしも奏功しない。これとは反対に意図的に「(ある事柄を)教えない」という選択は学生を知識の享受者にしないために不可欠である。この他に学習当事者としての意欲を喚起するためには，授業を「学生と作る」「学生が創る」「学生が支える」という発想も有効である。本ワークショップでは，スタイルとしての「学問モデル」(student-centered PBL:「問い」自体を学生が発見・発掘・創造する PBL)をベースに，学生が学習意欲や知識への親近感を抱くことのできるハイブリッド型授業の実例を紹介した。その後，グループワークをケースとして取り上げ，グループワークを開始する手前の段階で学生を能動的にするための仕掛けや工夫について参加者とともに考え，創案

する機会を持った。

キーワード : アクティブ・ラーニング, How to Learn, What to Teach, What not to Teach, student-centered PBL, 学問モデル

⑤「キャリア教育の視点から高大接続を考える」

担当者 : 立石慎治(国立教育政策研究所)

概要 : 将来の予測が困難な時代において、答えのない問題に自ら答えを見いだすのに必要な力は、初等中等教育から高等教育に至るまで、すべての学校段階を通じて育まれるべきものであろう。しかし、その一方で、上記の力をどのようなやり方で身に付けさせていくかについては、考えられるアプローチは多様である。本ワークショップでは、すべての学校段階にて取り組まれてきているキャリア教育を解の一つとして位置づけ、キャリア教育の視点から高大接続を考え、捉え直すことを試みた。前半は、ワークショップ担当者によるショートレクチャーを通じて、キャリア教育及び高大接続に関する基本的な情報を共有した。後半は前半を踏まえ、参加者の所属機関における高大接続やキャリア教育の実践事例を参加者間で共有し、ダイアログを行った。対話の過程と場からヒントを得て、終了時には高大接続やキャリア教育の実践においては、関係者との対話や目指すべきビジョンの共有を行うことの重要性を改めて確認した。

キーワード : キャリア教育, 高大接続, ダイアログ

⑥「初年次教育における評価の実行可能性を高めるために」

担当者 : 杉谷祐美子(青山学院大学)

成田秀夫(河合塾)

成瀬尚志(長崎外国語大学)

山本啓一(九州国際大学)

概要 : 初年次教育の課題は多岐にわたっており、一元的な評価ではとらえきれないため、さまざまな評価方法が試みられている。本ワークショップでは、いつ、だれが、なにを、何のためにどのように評価するのかという点を整理し、より実行可能性の高い評価のあり方について、参加者とともに考えた。まず、高等教育における評価の全体像について俯瞰し(杉谷)、学生のコンピテンシー評価の実例報告(山本)と、ループリックのモデレーションに関する実例報告(成瀬)とを踏まえ、参加者から提起された疑問点や課題についてディスカッションした。参加者からは、評価の全体像を理解できた、教員の評価能力の向上が課題である、ループリックを用いた有効性と難しさもわかった、今後のカリキュラム改善に活かしていきたいといった感想が寄せられた。

キーワード : 学修評価, パフォーマンス評価, ループリック, 信頼性, 実行可能性

⑦「選抜性の高い人文系学部における初年次教育の模索： 何に力点を置くべきか？」

担当者： 沖 清豪(早稲田大学)

概要： 本WSでは、特に人文学系の、一般的に大規模かつ選抜性が高い大学・学部において初年次教育を展開していくにあたって必要な視点、あるいはその中で獲得させるべき技能について、参加者の経験を積み上げて、知見の共有を目指した。技能習得に特化した指導への拒否感が依然として残っており、初年次教育の一斉導入が容易ではない(伝統的)大学の場合に、例えば「読む」「考える」「書く」「伝える」「議論する」といった経験や技能を確保するために必要となる指導方法や留意点を整理するために、参加者の事例・課題を踏まえた意見交換を行った。

キーワード： 人文学系学部, アカデミック・スキル, 古典, ジェネリック・スキル

⑧「LTD 話し合い学習法」

担当者： 安永 悟(久留米大学)

概要： LTD (Learning Through Discussion) は、テキスト(課題文)を読解する理想的な学習法であり、対話法である。本学会では授業外学習時間が増える学習法と紹介した方が、通りがいいかもしれない。本ワークショップでは、LTDの基本的な考えと実施方法を、具体的な課題文を用いて体験的に理解した。また、大学授業への導入方法についても検討した。LTDは協同学習の一技法であり、個人による予習と集団によるミーティングによって構成されている。予習もミーティングも、LTDの基本的な考え方と手続きが凝縮されたLTD過程プラン8ステップ(雰囲気づくり、ことばの理解、主張の理解、話題の理解、知識との関連づけ、自己との関連づけ、課題文の評価、ふり返し)に沿って行う。参加者は過程プランにそって課題文を予習し、予習ノートを作成する。ミーティングでは、その予習ノートを手がかりに、仲間との対話を通して、課題文の理解を深める。LTDを実践するには、LTDの基盤となる協同学習の考え方と技法の習得が前提となる。LTDを獲得すると、PBLを初めとしたグループ学習や、グループ活動を組み込んだ体験学習など、いわゆるアクティブ・ラーニングの質を高めることができる。また、LTDによる読解力が基盤となり、文章作成力の育成にも役立つ。

キーワード： LTD, 読解力, 文章作成力, 協同学習, 授業づくり

⑨「1 時間で作る映像作品—自己表現と共同学習」

担当者：坂倉杏介(慶應義塾大学)

横山千晶(慶應義塾大学)

山田健人(学生アシスタント, 慶應義塾大学)

概要：慶應義塾大学で開講している「身体知・映像」の授業で、初回に行っているワークショップ、デジタルカメラの連写機能を使って、1時間の共同作業を経て、5分程度の映像作品を作るという作業を体感した。このワークショップには二つの目標がある。一つは「自己表現」への誘導である。このワークショップでは、日常、私たちが視覚情報を読み解くときに無意識に使っている視覚表現の基本的な「文法」を再確認するとともに、映像という自己表現への興味を引き出すことを目標としている。二つ目の目標は、チーム・ビルディングを通じた共同学習の模索である。限られた時間内の作業では、二つの視点が必要となる。一つは役割を見出し、積極的に動くということ。もう一つは他者の創造力を見出し、その力を発揮してもらうということである。このワークショップでは、学生にありがちな創作の傾向、具体的には先に「オチ」から考える、またストーリーを先に考えることを禁止するという縛りを設けることで、メンバーの臨機応変な想像力と共同作業を喚起するように仕向けている。今回、三つのチームは、異なる視点を中心に作業を行った。一つ目のチームは学会という場の設定、二つ目のチームは小物を中心とした設定、三つ目のチームは、無生物を生き物のように扱うという設定でそれぞれ作品を作ってくれた。上映会のあとに意見交換を行ったが、振り返りの時間が十分に取れなかったことが悔やまれる。しかしながら、さまざまな気づきがあった、他者の意外な想像力に驚いた、との意見を頂戴した。今回のやり取りをもとに、ワークショップの意義をさらに模索していく予定である。

キーワード：身体知、視覚表現、共同学習

⑩「初年次教育の質を高める教員協働を考える —文章表現科目の実践を例にして—」

担当者：中村博幸(京都文教大学)

吉村充功(日本文理大学)

堀上晶子(河合塾)

概要：今までのWSでは、初めて文章表現科目を担当した教員を対象に、チェックアンドシェア、シラバスの作成などのグループワークを行ってきた。しかし、複数担当者による文章表現科目では、それに加え、様々な要因が関係する。そこで、今回のWSではまず、教員協働の前提となる文章表現科目を担当した際の授業イメージを、チェックシートにより明らかにするとともに、参加者グループで問題意識を含めてシェアを行った。次に、評価や担当者間の指

導のバラツキをなくしたり、効果的な教材作成の方法などについて、文章表現科目の設計を考える観点から二つの大学の事例紹介を行い、参加者は参考になる点や取り入れてみたい点、疑問点などの検討を行った。さらに、科目運営の問題点に対する解決策をグループディスカッションにより行った。今回は、科目の設計コーディネータの方、実際に授業を担当する方が多く参加され、それぞれの立場で、教材、指導、評価のあり方や教員間の連携の取り方を解決するヒントを持ち帰っていただいた。

キーワード： 教員協働，教育観，授業設計

⑪「初年次学生に対する上級生のサポートをいかに組織化するか —行動の指針になる評価表を上級生たちと作成する—」

担当者： 田中 岳(九州大学)

森川園子(国際基督教大学)

概要： 大学そのものに不慣れな初年次学生のサポート役として、上級生たちは重要な役割を担うことができるであろう。もちろん、そのサポートを大学として提供する場合には、教職員による周到なマネジメントが求められる。行き当たりばったりのサポート体制では、改善の契機を見失ってしまうからである。では、発見された改善策を実行するのは翌年度になってからであろうか。前年度の反省点について上級生たちと情報共有して当該年度の実施を始めたものの、それらを活かすには、実際のサポート場面があまりにも慌ただしいものといえるかもしれない。上級生たちのサポート活動そのものが改善サイクルにもなっているような仕掛けを埋め込むことに着眼する必要がある。本ワークショップでは、上級生たちのサポートが質的に向上する評価のあり方について参加者全員で集合知を創出することが目的とされた。評価表のプロトタイプ(試作)を作成する試みとして、次のような目標、役割、過程が提示され、当日のプログラムは進められた。

[目標] ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになる。

[役割] 担当者は会場の相互作用を活性化する進行に努め、参加の皆さんには主体的な活動をお願いする。

[過程] ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体でそれらを共有する。

キーワード： 上級生，上級生のサポート，教職員，評価，質向上